

# 紀州徳川家伝来の 龍笛・能管について

*Ryuteki/Nokan of the Heirloom of Kishu-Tokugawa Family*

高桑いづみ

TAKAKUWA Izumi

はじめに

①龍笛

②能管

おわりに

## 【論文要旨】

紀州徳川家伝来楽器の内、国立歴史民俗博物館が所蔵する龍笛・能管あわせて27点について、熟覧及びX線透過撮影を通して調査を行った。

その結果、高精度の電子顕微鏡によって従来「平樺巻」とされてきた青柳（H-46-39）が、樺ではなく籐ないしカラムシのような蔓を巻いていたことが判明し、仏像の姿に成形した錘を頭部に挿入した龍笛があることが判明するなど、従来の調査では得られない成果が多々あった。一方、付属文書と笛本体が一致しない例もあり、笛が入れ替わった虞れも考えられる。たとえば能管の賀松（H-46-53）は、付属品や頭部の頭金の文様から、『銘管録』に載る「古郷ノ錦」ではないかと推測される。いつの時期か不明だが、コレクションの実態が混乱したようである。時期は不明だが、紀州徳川家のコレクションは少しずつ散逸してきた。その事実と照らし合わせながら、今後さらなる調査が必要になるであろう。

【キーワード】 日本音楽、楽器学、楽器、雅楽、能楽、龍笛、能管

## はじめに

国立歴史民俗博物館（以下歴博と略称）は、紀州徳川家伝来の龍笛・能管あわせて27点を所蔵している。笛は製作年代を特定しにくい楽器だが、今回はX線透過撮影を通して従来の熟覧よりは調査を進めることができた。また、笛師の田中敏長・彩子夫妻に参加いただいて、製作者の立場からのご意見もうかがった。

横笛に関しては、紀州徳川家以外にも各地に伝世品がある。なかでも、徳川治宝（1771—1853）<sup>(1)</sup>とほぼ同時代に彦根藩主となった井伊直亮（1794—1850）<sup>いのおあき</sup>が雅楽器を精力的に集めたことは夙に知られており、そのコレクションが彦根城博物館に収められている。彦根城博物館の龍笛や他機関が所蔵する能管については、高桑がX線透過撮影調査を行って比較しうるデータも得ているので、<sup>(2)</sup>その成果と照らし合わせながら紀州徳川家旧蔵管楽器（以下紀州コレクションと略称）について考察したい。

なお、27管の全体写真、およびX線透過撮影写真は一括して永嶋氏の研究ノート222～235ページに掲載してある。適宜参照していただきたい。

### ①……………龍笛

まず、現在行われている龍笛の製作工程について簡単に記述しておく。以下の内容は、田中氏からご教示いただいた事柄を中心に高桑がまとめたものである。紀州コレクションの笛の中には一部破損しているものがあり、工程の一部をうかがうことができた。

- ① 笛材には篠竹を用いる。全体の姿を美しく整えるために頭部には真竹など節の太い竹（男竹）を選ぶことが多く、節の細い篠竹（女竹）と接いで成形する。
- ② 孔をあける位置は、物差（＝ブサシ）と呼ばれるモデルに従って定める。
- ③ 孔をあけたあと、管の内外に砥の粉などを混ぜた下地漆、朱漆を塗り重ねていく。内径と孔の削り方を調節して調子を合わせる。
- ④ 指孔部分、歌口部分は竹材の外皮を削る。この作業を「谷グリ」と称する。また竹の繊維を掻き取って筋をつけることもあり、これを「猫掻キ」と称する。
- ⑤ 笛全体にふくらみをつける目的で、節・歌口・指孔以外の部分に薄い杉製のへぎ板や和紙を巻いて、樺巻きの下地とする。指孔間には竹材の割れを防ぐために麻糸を巻いて下地とすることがある。古管では、指孔間の竹を削って溝を作り、そこに糸を巻くやり方もあった。
- ⑥ 爪形に成形した別材（セミと称する。黒檀製が多い）を、頭部にはめこむ。これは昆虫の蟬を意匠化したものである。
- ⑦ 1枚の薄い樺（樺桜の表皮）を裁断して紐状にし、それをつないだものを巻いていく。樺を巻いたあと、黒漆を塗布する。樺以外に籐を巻くこともあるが、籐の場合は、漆がはげた跡が白くなるので判別は容易である。
- ⑧ 吹奏する際のバランスを取るため、頭部に鉛の錘を入れる。

## ⑨ 頭部先端に錦の裂でくるんだ木栓を詰める。

次に、表について解説しておく。この表は、歌口の中心から各指孔の中心までの距離をそれぞれ示したものである。紀州コレクション以外に、参考として安国寺の阿弥陀三尊像（1192年の造立）の胎内に納入されていた龍笛、彦根城博物館、東京国立博物館蔵の龍笛の測定値も付しておいた。計測では1mm以下の誤差は出てしまうので数値は絶対的とは言い難いが、龍笛のモデルを知る参

表1 龍笛 歌口から各指孔までの距離

| 所蔵者と銘    | 全長    | 頭部から<br>歌口迄 | 第1指孔<br>迄の距離 | 第2指孔<br>迄の距離 | 第3指孔<br>迄の距離 | 第4指孔<br>迄の距離 | 第5指孔<br>迄の距離 | 第6指孔<br>迄の距離 | 第7指孔<br>迄の距離 |
|----------|-------|-------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 歴博 木枯    | 39.5  | 11.15       | 11.55        | 14.075       | 16.4         | 18.625       | 20.8         | 22.3         | 24.55        |
| 歴博 秋津丸   | 39.8  | 11.3        | 11.75        | 14.2         | 16.5         | 18.75        | 20.7         | 22.7         | 24.55        |
| 歴博 青柳    | 40    | 11.45       | 11.75        | 14.05        | 16.2         | 18.4         | 20.55        | 22.55        | 24.4         |
| 歴博 僻邪丸   | 40    | 11.3        | 11.8         | 14.2         | 16.55        | 18.7         | 20.75        | 22.65        | 24.8         |
| 歴博 喜久丸   | 39.2  | 10.625      | 11.75        | 14.175       | 16.575       | 18.85        | 21           | 23           | 24.875       |
| 歴博 初蟬    | 39.6  | 11.3        | 11.5         | 14.15        | 16.45        | 18.7         | 20.8         | 22.825       | 24.75        |
| 歴博 白雲    | 40.1  | 11.5        | 11.7         | 14.25        | 16.55        | 18.7         | 20.7         | 22.7         | 24.55        |
| 歴博 金龍    | 40.1  | 11.55       | 11.6         | 14           | 16.25        | 18.55        | 20.6         | 22.6         | 24.55        |
| 歴博 蟬丸    | 39.9  | 11.15       | 11.7         | 14.3         | 16.775       | 19.05        | 21.2         | 23.1         | 25           |
| 歴博 雲鶴    | 39.9  | 11.35       | 11.85        | 14.3         | 16.55        | 18.75        | 21.05        | 22.8         | 24.7         |
| 歴博 菊水    | 39.7  | 11.05       | 11.5         | 13.95        | 16.4         | 18.75        | 20.8         | 22.7         | 24.5         |
| 歴博 千鳥    | 40.4  | 12          | 11.15        | 13.95        | 16.2         | 18.4         | 20.5         | 22.4         | 24.3         |
| 歴博 千載丸   | 40.15 | 11.1        | 11.6         | 14.15        | 16.35        | 18.75        | 20.9         | 23.05        | 25.05        |
| 歴博 鹿丸    | 39.8  | 11.2        | 11.6         | 14.25        | 16.65        | 18.9         | 20.9         | 22.75        | 24.625       |
| 歴博 力草    | 39.9  | 11.15       | 11.8         | 14.1         | 16.3         | 18.6         | 20.75        | 22.75        | 24.9         |
| 歴博 梅花    | 39.7  | 11.25       | 12.05        | 14.7         | 16.95        | 19           | 21           | 22.9         | 24.85        |
| 歴博 芦田鶴   | 40.4  | 11.65       | 11.6         | 14           | 16.35        | 18.5         | 20.7         | 22.7         | 24.65        |
| 歴博 青海波   | 40    | 11.2        | 11.7         | 14.05        | 16.45        | 18.7         | 20.8         | 22.8         | 24.75        |
| 歴博 連管    | 38.9  | 10.95       | 11.2         | 13.65        | 15.95        | 18.2         | 20.3         | 22.375       | 24.3         |
| 歴博 46-59 | 39.6  | 11.375      | 11.525       | 14.025       | 16.325       | 18.575       | 20.675       | 22.625       | 24.475       |
| 歴博 お次用1  | 40.6  | 11.7        | 11.9         | 14.5         | 17.025       | 19.25        | 21.325       | 23.3         | 24.975       |
| 歴博 お次用2  | 39.9  | 11.15       | 11.2         | 14.25        | 16.55        | 18.775       | 20.85        | 22.85        | 24.25        |
| 歴博 お次用3  | 40    | 11.4        | 11.6         | 14.05        | 16.4         | 18.675       | 20.75        | 22.725       | 24.625       |
| 歴博 お次用4  | 39.75 | 11.3        | 11.2         | 13.85        | 16.225       | 18.55        | 20.55        | 22.425       | 24.3         |
| 安国寺 納入笛  | 40.7  | 12.05       | 11.7         | 14.15        | 16.55        | 18.65        | 20.75        | 22.8         | 24.6         |
| 彦根 花鳥丸   | 39.7  | 11.1        | 11.7         | 14.25        | 16.5         | 18.8         | 20.85        | 22.75        | 24.55        |
| 彦根 斑鳩丸   | 39.6  | 10.9        | 11.9         | 14.35        | 16.65        | 18.8         | 20.95        | 23           | 24.9         |
| 彦根 讚竹丸   | 40.2  | 11.6        | 11.55        | 14.1         | 16.65        | 18.6         | 20.7         | 22.7         | 24.65        |
| 彦根 福原    | 39.9  | 11.65       | 11.6         | 14           | 16.5         | 18.7         | 20.7         | 22.55        | 24.5         |
| 彦根 葛城丸   | 39.8  | 11.1        | 11.7         | 14.15        | 16.5         | 18.6         | 20.7         | 22.65        | 24.55        |
| 彦根 宮城野   | 39.8  | 10.9        | 11.65        | 14.15        | 16.5         | 18.85        | 20.9         | 22.9         | 24.85        |
| 彦根 義経丸   | 40.2  | 11.6        | 11.25        | 13.85        | 16.2         | 18.4         | 20.5         | 22.4         | 24.25        |
| 東博 鳳凰    | 39.5  | 11.1        | 11.55        | 14           | 16.35        | 18.5         | 20.6         | 22.55        | 24.35        |
| 東博 はまつと  | 39.5  | 11.05       | 11.55        | 13.65        | 16.15        | 18.35        | 20.45        | 22.5         | 24.5         |
| 東博 占月丸   | 40.2  | 11.6        | 11.55        | 14.55        | 16.65        | 18.9         | 20.95        | 22.85        | 24.65        |
| 東博 芦田鶴   | 40.2  | 11.35       | 11.5         | 14           | 16.45        | 18.4         | 20.8         | 22.8         | 24.75        |
| 東博 千張    | 39    | 11.25       | 11.7         | 13.9         | 15.95        | 18.15        | 20.15        | 22.15        | 24.1         |
| 東博 華月丸   | 40.4  | 12          | 11.6         | 14           | 16.3         | 18.55        | 20.65        | 22.9         | 24.85        |
| 東博 昌平丸   | 40.1  | 11.7        | 11.6         | 14           | 16.3         | 18.45        | 20.55        | 22.6         | 24.6         |

考にはなるだろう。38管を平均すると、歌口から第1指孔までは11.5～11.8cm、第2指孔までは14～14.2cm、第3指孔までは16.4～16.6cm、第4指孔までは18.5～18.7cm、第5指孔までは20.6～20.8cm、第6指孔までは22.6～22.8cm、第7指孔までは24.5～24.7cmが標準になる。そこから大きく外れる管は音高が変わる可能性が高い、ということである。もちろん、音高は管の長さだけではなく管の内径や指孔の直径、内部の削り方などとも関係するが、各管の音高測定は行っていないので、各管の特徴をつかむ参考資料として提示した。

以下、個々の管について詳述する。

### ① 木枯(H-46-37)

付属文書は2通。1通は嘉永元年(1848)と記された神田大和介藤原定光(喜一郎)の鑑定書で、そこには「御横笛 壱管 右者年暦三百年位之御器、作者難相分候」と書かれている。この鑑定に基づいたのであろう、国立歴史民俗博物館資料図録3『紀州徳川家伝来楽器コレクション』(以下、図録と略称<sup>(3)</sup>)では室町時代の製作としている。紀州コレクションには神田による鑑定書が数多く見られるが、その信憑性については論じられたことがない。琵琶「朝陽」の付属文書によると神田家は治定・治光を祖とし、代々朝廷の御用を勤める琴師で楽器商でもあった。琵琶や箏のように楽器の内部が広くて製作や修理の情報を書き記せる場合、鑑定書は製作年代等の判断材料になりうるが、情報を記すスペースのない横笛類にとって鑑定書の記述をどこまで信頼するかは大きな問題である。概して劣化の程度、竹素材の風化の度合いが年代判定の基準になっているようだ。製作者のみならず旧蔵者についての情報も同じである。木枯は『元紀州徳川家所蔵雅楽器目録』(以下『烏根目録』<sup>(5)</sup>と略記)では野々宮家旧蔵となっている。しかしこれを記した付属文書は現存しないので、真偽のほどは不明というほかない。

鑑定書の記述が正しいかどうか現時点では即断しかねるが、かなり吹奏した笛であることは確実である。指孔はかなり摩耗して、歌口と指孔の廻りを朱漆で塗り直している。歌口の向かい側には息を吹き込んだ跡(息道)が真っすぐについて白濁している(写真1)。神田の鑑定も、そうした吹奏痕が根拠となっているようだ。もう1通の付属文書は神田から名倉吉蔵・山村宗助に宛てた書状だが、修復を命じられ、音律をあわせるなど手を入れた後、東儀伊勢守に試奏させた由が記されている。吹奏の際、左手親指で笛を支える付近は樺が摩耗したのか上から黒漆で補修した跡が見えるが、これ以外に修復したのは歌口や指孔周辺だけである。歌口周辺の樺もはがれかけ、下地のヘギ板が一部のぞいているが、樺を巻き直してはいない。ちなみに樺は、龍笛としては標準的なやや太めの幅である。

裏側のセミは別材をはめ込んだ通常の形だが、その周囲に孔があいている(写真2)。中古時代には別材でセミを成形せずに小枝を払っただけの作例があり、正倉院には小枝をそのまま残す伝世品もある。小枝を払った形状がセミの古形と推測されるが、平安時代には「蟬折」と銘をつけて小枝が折れたままの笛を珍重する例もあった。田中氏によると、自然の風合いを好む趣向からセミ周辺の竹に人工的に孔をあけて虫食い風に細工を施す例があるそうだ。自然の虫食いでは複数の小さな孔が一箇所にとまってあくことが多く、木枯のように大きな孔が点在したり、ミミズのように広がった形状になることは少ない。木枯の場合は、人工の可能性が高いだろう。

X線透過撮影では、息袋（歌口から第1指孔までの内部）の第1指孔付近に1箇所切れ込みが認められる。管を接ぐ場合は継ぎ目が入れ子状に映るが、木枯ではそうはなっていない。切断ではなく糸を巻いた跡のようにもみえたが、拡大すると竹の中央に亀裂が認められた（写真3）。劣化で竹本体に自然に入った亀裂のようだ。こうした内部の亀裂は彦根城博物館の古管にも見られたが、外見からは判断できないだけに取り扱いに注意が必要である。頭部は錘を挿入するためにいったん切断して接いでいるが、歌口から管尻までは一材、と判断できる。

### ② 秋津丸(H-46-38)

付属文書は2通。1通は「真古管年暦五百年以前之御器 聖護院宮御器蜻蛉之御管と同作」と、天保4年（1833）に神田喜一郎が認めた鑑定書である。この鑑定書とあわせて宇佐見筑前守から神田に宛てた書状があり、そこに「時代恰好、悉皆蜻蛉御笛与符合候而、同作ニ無相違候」と記されている。その内容に則ったのであろう、図録では南北朝から室町の作としている。

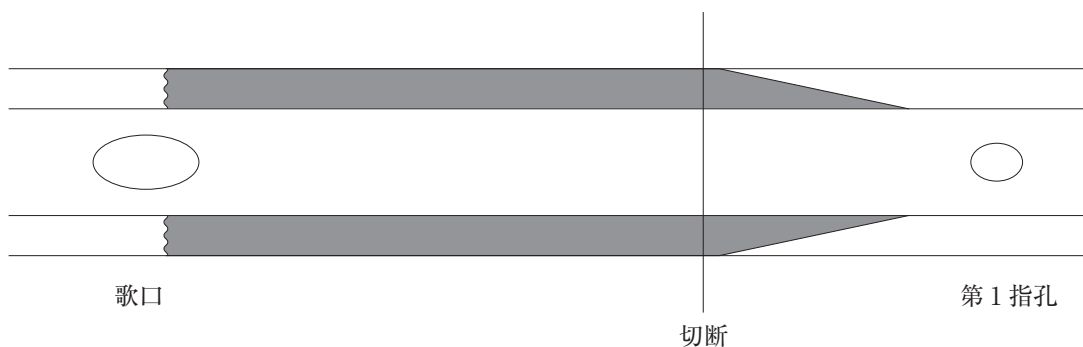
木枯よりなげ200年以上製作が遡るのか根拠は不明だが、古色の強い笛である。かなり大部にわたって朱漆で補修を行っているが、指孔、歌口、セミ付近の摩耗がことに著しい。指孔内側の朱を見ると、削り直して広げた跡がある。歌口は白濁し、かなりの吹奏痕がある。セミについては別材で成形せず、小枝を払っただけの姿で古態をとどめている（写真4）。

吹奏の際、親指の当たる箇所は劣化しやすい。秋津丸の場合、右手親指の当たる指孔裏はスレて朱漆で補修しているが、左手親指が当たる付近はさほど摩耗しておらず樺もはがれていない。劣化の度合がアンバランスだが、X線透過撮影により、第1指孔付近で1箇所切断して管を接いだことが判明した（写真5・図1）。息袋部分を後代に差し替え、全体の樺を巻き直した可能性が考えられる。古管を多く所蔵する彦根城博物館のコレクションでは、歌口から管尻までは接ぎのない管が多い。秋津丸にしても、息袋部分の継ぎは後補と考えたい。

### ③ 青柳(H-46-39)

付属文書は1通。応永5年（1398）に足利義満より山井筑前守が拝領したとの由緒書で、それに則って図録では鎌倉時代の作としている。拝領したのが室町初期であるからそれ以前の作、という可能性は外見から十分考えられる。樺巻きが特異で、一見して古管と感じられる笛である。

樺が線状ではないので、図録でも「平樺巻」と判断していた。樺を細く糸のように裁断して巻く



黒い部分は挿入した別材

図1 龍笛

のではなく、平たい面のまま巻く技法である。熟覧段階では指孔間に下地として巻いた糸しか判別できなかったが(写真6)、高精度の電子顕微鏡により植物の繊維が認められた(写真7)。樺ではなく葎のような蔓を巻いた可能性が考えられる。吹奏の際左手親指があたる範囲は広く巻きがはがれ、表面を漆で補修しているが巻き直しはない。「樺」を珍重して巻き直さなかったのだろう。表面全体に及ぶ光沢は補修の漆をくり返し塗布したため、透き漆に荏胡麻油を混ぜたのではないかと中里寿克氏が推測された。歌口部分が削れて朱漆で大きく補修した跡があるほか、指孔部分の竹材には亀裂も入り、材は枯れきっている(写真8・9)。セミは黒檀製で通常の形状をしているが、「樺」が珍しく材も古い点を考慮すると、現在のセミが製作時当初からのものか否か判断はむずかしい。樺にあわせてセミも異形であった可能性が考えられる。なお、頭部の錦はかすかに残っていた。

X線透過撮影では歌口から第1指孔にかけて2箇所縦の筋が見えるが、筋の付近が入れ子状になっていない。別材を挿入した跡ではなく、下地として巻いた糸等が映ったのであろう。歌口から管尻までは一材と認められる。

指孔の間隔は標準よりは多少短めだが、許容範囲内と判断した。

この管には竹製の筒も付属していた(写真10)。他では見かけない形状と材質で注目されるが、この笛本来の付属品かどうか断定はできない。

#### ④ 辟邪丸(H-46-40)

付属文書は2通。享徳3年(1454)、多忠久より忠時・忠宗・忠雄・忠清・忠喜・忠音・忠充まで伝来した由を文化13年(1816)に岡昌芳が記した伝来書とその写しで、図録では室町時代の作としている。歌口や指孔付近は摩耗が著しく、息道がまっすぐ白濁して残っており、かなり吹奏したらしい。セミについては別材で成形せずに小枝を払っただけの姿で、さらに付近に孔をあけて虫食い風に見せるなどの細工を施している(写真11)。

X線透過撮影では接ぎは見あたらなかった。歌口から管尻まで一材で成形している。ただし、息袋部分と第2指孔から下方の指孔部分の内部は下地を少し厚く塗布したようだ。大きな補修をせずに、製作当時のまま伝世したものであろう。

2007年8月の調査時、お次用(H46-60-(3))の管から「辟邪丸」と墨書された紙片が発見された。お次用については後述するが、管が入れ替わった可能性も考えられる。入れ替わった時期については慎重に考えたい。

#### ⑤ 喜久丸(H-46-41)

付属文書は1通。神田喜一郎の鑑定書で、「凡三百年余」とあるのみ。図録では室町末期から江戸初期の作としている。竹材は少々劣化が進んでおり、一部朱漆で補修した跡がある。樺も一部擦れており、やはり朱漆による補修がみられる。セミの脇には孔もあいていた。指孔付近の竹には、指孔3つ分以上の長さにわたって均一の幅の筋が並行してついている(写真12)。材の亀裂にしては浮きが認められるので、竹材を細かく割いて裏返し、竹材の堅い外の部分が笛の内側になるよう細工をする、いわゆる「返シ竹」の技法による可能性も考えたい。返シ竹にすると柔らかい竹の内部が笛の表面に露出するので、竹材は劣化しやすい。谷グりが浅いのも、返シ竹の技法と関係があるのかもしれない。ただし、X線透過では竹材の筋は映っていない。

この笛の特徴は、全長が39.2cmと龍笛としては短い点である。X線透過撮影によると、歌口と

第1指孔の間を2箇所切断して接ぎ、糸を巻いて補強した上に樺を巻いている(写真13)。修理のために息袋部分を切断し、その結果短くなったという推測も成り立つが、樺巻は一部スレがあるものの頭部から管尻まで一様で、息袋部分のみ巻き直したようには見えない。切断は製作当初の工程だったと考えたい。全長40cmを標準とする龍笛では約1cm短いと音律がその分高くなり合奏が困難になるが、喜久丸の場合、短いのは管頭から歌口までで、歌口から各指孔までの距離はおおよそ標準に則っている。音律にはさほど影響がなさそうだ。

興味深いのは、後から指孔を大きく削った点である。平均的な指孔の直径は1.2cm程度だが、喜久丸では1.4cmもある。削った跡に別の朱漆を塗布したため、歌口・指孔の内部の朱漆と指孔周辺の朱漆の色が異なる。指孔を大きくすると音律が高くなるが、歌口から各指孔までの長さが標準なのになぜ指孔を大きくしたのだろうか。実際に吹奏して音高を確認したいところである。

この笛については、再述する。

#### ⑥ 初蟬(H-46-44)

付属文書は1通。神田貞蔵による鑑定書で、「南都芝家所持、年暦二百年余」と記されている。図録では江戸時代初期としているが、かなり吹奏したようで、指孔の摩耗跡を黒漆で補修しているし、指孔自体を削り直している。また、左手親指の当たる位置がすりへっていてもいる。樺巻きによる盛り上げがさほど厚くなく、下地が極めて薄い。頭部に金蒔絵で「初蟬」と銘を記した跡がうっすらと残っている。

X線透過撮影により、歌口から第1指孔にかけて2箇所切断し、別材を挿入していることが判明したが、樺は巻き直した様には見えない。江戸初期の作、という判定が正しいとすれば、製作当初からこの部分は別材で工作したということだろう。

#### ⑦ 白雲(H-46-45)

付属文書は9通。かつて熊野古座辺りに居住する高川原摂津守が所持していたが、高川原家断絶の折に内海屋伝兵衛の所持となり、その後も持ち主を替えて文政7年に紀州家の買い上げになった、と伝来を記す書き付けが大半で、作者・製作年代についての鑑定はない。唯一、東儀播磨守・出羽守から海野静菴にあてた書状に「客別歳経候物とも無御座候様、被思召～随分宜敷品ニハ候へ共、少々小管御座候～一人申居候ニハ、年数之処大体百五拾年余～小管ト久ク吹入無御座候事残念」と書かれている。この書状に基づいて図録では江戸時代の作としている。書状では小管と記しているが全長40.1cm<sup>(6)</sup>、標準の長さである。指孔付近の材に亀裂が入り(写真14)、樺巻きの下地で塗布した朱漆が一部見えている。セミ付近では頭部の樺がはがれて下地のへぎ板や和紙がのぞいている(写真15)。久しく吹奏したことがない、と書かれているが、管尻はいわゆる「つば腐れ」で内部に塗布した朱漆が少しはがれている(写真16)。つば腐れはよく吹奏した管に見られることだが、紀州家所蔵になってから頻りに吹奏したとしても、劣化は著しいように見受けられる。頭部の錦はきれいに残っているが、この笛が江戸初期の作とするならば、管の外見は劣化の度合いを測るひとつの尺度としたいところである。

時期は確定できないが、紀州コレクションの楽器は一部の伝来が混乱したようだ。白雲に関していえば、付属文書の「小管」という記述が気にかかる。前述した様にこの笛は決して小管でない。突飛なようだが、この文書は、たとえば喜久丸に本来付属していた、と想定できないだろうか。小

管で吹奏歴の少ない笛，と言えは喜久丸の方が似つかわしい。「年暦三百年」という「喜久丸」の付属文書の記述には，劣化の程度からして白雲の方が合致しそうである。伝来を記した文書に笛の名は書かれていないので，文書あるいは笛本体が入れ替わった可能性も考慮に入れたい。入れ替わったとすれば，島根文書が制作される以前のことである。

X線透過撮影の結果，歌口から管尻までは一材で成形していることが判明した。3箇所縦の筋が見えるが，これは切断ではなく，下地の糸を巻いた跡と判断できる。

#### ⑧ 金龍(H-46-46)

付属文書は8通。島根目録では初代獅子田太郎作となっているが，付属文書は銘や筒の蒔絵，袋に触れるのみで，由緒に関する情報がない。森田光春編『森田流奥義録』<sup>(7)</sup>には「笛之作者」と称する一覧が載っており，「中古上作之部」に「京都 了竹ト号ス」として古獅子田の名があがっている。「古作之部」に名のある玄笛が天文年間の笛役者<sup>(8)</sup>なので，そのあとの代とすれば活動時期は江戸初期頃であろう。

この笛は歌口が少し摩耗して朱漆がはがれているが，指孔部分にはさほどスレが認められない。セミは小枝を払っただけのシンプルな姿だが，笛本体とは別材をはめこんでいる。頭部が緩んでいた<sup>(9)</sup>ので，セミ挿入の様子をうかがうことができた（写真17）。歌口，セミには修復のために朱漆を施した跡が残っている。X線透過撮影では，とくに変わったところは見あたらなかった。切断箇所はなく，歌口から管尻までを一材で成形している。

なお，金龍は高麗笛と連管になっているが，現在一緒に筒に収められている高麗笛は，朱漆の色や樺巻きの様子が龍笛とはかなり異なる。2007年の調査時，この高麗笛の管尻に「青海波」と墨書された紙片が入っていた。本来は青海波の連管だったのかもしれない。

#### ⑨ 蟬丸(H-46-47)

付属文書は5通。そのうちの1通が山野井伯耆守からの添書で，山野井家持来の楽器を懇望されて寛政10年（1798）に譲った，と記されている。「持来」という記述は「伝来」とはニュアンスが異なるのではないかと，という意見が調査時に遠藤徹氏から出た。歌口周辺には吹奏した跡，向かい側には息道が白く残っている。特徴的なのはセミの形状で，昆虫の蟬の姿に細工している。その周辺のみならず指孔の周辺にも孔があいているが，これは蟬の形にあわせて虫食い風に開けた細工であろう（写真18）。

X線透過撮影では歌口から第1指孔にかけて2箇所切断箇所が認められ，息袋部分には斜めの筋が見られた（写真19）。歌口や指孔の内部を覗くと，竹材に少々亀裂が見える。息袋内部にも同様の亀裂があって，それがX線に映ったのだろう。とするならば，竹材はかなりの年数を経たもの、と考えると良さそうだ。樺巻には多少のスレこそ見えるが，新しく巻き直したようには見えない。切断は当初から工程にくみこまれていた，と考えた方がよさそうである。とすると，セミも当初からこの形状をしていたことになる。セミの細工はいかにも江戸時代の好みに感じられるが，切断の工程や材の劣化とあわせて慎重に考えたい。

歌口から指孔までの長さは，第4孔までと第5孔までが標準よりかなり長めである。

なお，以前の調査で能管の可能性を示唆された<sup>(9)</sup>が，息袋部分の亀裂を喉と間違えたのであろう<sup>(10)</sup>。息袋はまっすぐで内径を狭めていない。



## ⑩ 雲鶴(H-46-48)

付属文書は5通。銘の染筆に関する文書がほとんどで、文化13年(1816)に岡甲斐守昌芳が献上して金3枚と白羽二重代金3両を与えた文書が来歴に関する唯一のものだが、岡家伝来とはなっていない。

樺が少々太め。歌口、指孔ともにそれなりの使用痕があり、汚れも目立つが漆で補修したようには見えない。セミが異形(写真20)なのは、焼け火箸で虫食い風に工作したのではないかと田中氏が推測された。

X線透過撮影では歌口から第1指孔にかけて2箇所縦筋が見えるが、切断痕ではなく、下地を厚く塗った箇所と考えられる(写真21)。歌口から管尻までは一材で成形している。錘が他管に較べて小さいが、当初からのものか不明である。

## ⑪ 菊水(H-46-49)

付属文書は2通。阿倍信濃守よりの書状で、所持していた笛を一条忠良(1774—1837)が「落梅」と命銘し、その後「菊水」と改銘したことが記されている。特異なのは表面で、指孔付近は樺が確認できるが、歌口付近や息袋のあたりはあぶくが立った様な風合いになっていて、通常と同じように樺を巻いただけとは判断できない(写真22)。書状では「勅銘葉風与申候御笛、落梅同様ニあこめ装束之写被仰付候」と記している。「あこめ」とは単衣と下襲の間に身につける衣服で、上衣を着ずに「あこめ」だけでの姿を「あこめ姿」というらしい。<sup>(11)</sup>彦根城博物館の龍笛「斑鳩丸」と「孔雀丸」も『楽器類留』<sup>(12)</sup>に「あこめ巻」、『集古十種』所収の「寛治丸」も「アコメ漆ヌリ」と記されているが、同じ意味を表しているのだろう。実際には、「斑鳩丸」「寛治丸」と「菊水」ではかなり製法が異なる(「孔雀丸」は未見)。「斑鳩丸」「寛治丸」はへぎ板の代わりに和紙を巻き、樺巻をせずに和紙に直接黒漆を塗布しているが、「菊水」では樺は巻いている。樺巻部分がもりあがらず厚みのない点が似ているので、「あこめ」という語を用いたのだろう。中里寿克氏によると、樺巻の上に塗った漆の縮み具合がうまくいかなかったためにあぶく様の表面となったらしい。それを風合いとして珍重したのは、いかにも日本人の好みらしく興味深いところである。

指孔部分はそれなりの吹奏痕があって汚れており、スレや樺のはがれも見受けられるが、補修した跡は見られない。セミが異形で、裏だけでなく表にも孔が複数あいている。「あこめ」にあわせて虫食い風に工夫したのかもしれない。

X線透過撮影では、息袋部分で樺巻の下地をかなり厚く塗っていることが判明した(写真23)が、下地の厚さはあぶく状の表面とは関係がなかろう。接ぎはなく歌口から管尻まで一材で成形されている。

## ⑫ 千鳥(H-46-50)

付属文書はない。指孔・歌口ともにかなり劣化して、歌口には朱漆で修理をした跡が残っている。指孔付近の樺は一部はがれかけ、亀裂の入った箇所もある。セミは別材を埋め込まず、女竹の小枝を払った形状(写真24)。払った後に虫食い風の細工を施している。X線透過撮影で息袋部分・指孔部分が濃くなっているのは、補修のために下地を厚く塗った箇所と考えられる。切断箇所はなく、歌口から管尻まで一材で成形している。

⑬ 千載丸(H-46-51)

由緒を記した文書はない。歌口はかなり摩耗し、朱漆で数回補修した跡が見られる。かなり吹奏したようである。指孔部分の谷グリが深い。吹奏痕が著しいわけではない。ただ、竹材と樺両方に亀裂が入った箇所がある。セミ付近の樺が途中で切れているが、セミを後補するために切断したのだろう。セミは、やや円みを帯びた姿が特徴的である。X線透過撮影では、とくに変わったところはなかった。切断箇所はなく、歌口から管尻まで一材で成形している。息袋部分の下地をかなり厚く塗ったようで、濃く映っている。

⑭ 鹿丸(H-46-52)

付属文書はない。歌口付近の樺が一部はがれて、下地のへぎ板がのぞいている。そこを朱漆で修理した跡があり、朱の色が2種類以上認められることから、何回か修理を重ねたようである。竹材はかなり枯れており、歌口、指孔ともにそれなりの使用痕がある。吹奏の際、両手の親指のあたる箇所に少しスレがあり、息袋部分のスレは漆で補修している。セミは通常の姿だが、その横にYの字形に虫食い風の細工を施している。X線透過撮影では、切断箇所は認められなかった。歌口から管尻までを一材で成形したものである。息袋部分に見える数本の縦線は、下地として巻いた糸などであろう。X線写真には指孔を調整して削り直した跡もくっきりと映っている。

⑮ 力草(H-46-54)

付属文書16通。辻家伝来の笛だが、山本実規家に伝来した笛を狛高房(1702—1744)が拝領し、そのとき「力草」の銘がつけられた、と記している。その折に詠んだ歌、力草(植物)の絵に加えて、『教訓抄』や『胡琴教録』の写し、「文化六己巳夷則写 仲呂品玄六曲之譜 梅花曲」と題した龍笛譜も付属文書に含まれている。楽譜は元来H-46-55に付属していた可能性が強い。そのほか「力草 指田作」とだけ墨書した紙片が伝わっているが、これ以外に作者や年代について言及した文書はない。指田は一節切や能管の製作者として知られる笛師で、前述した「笛之作者」では「中古上作之部」にのる指田伝竹と考えられる。

指田作とするならば江戸初期頃の製作になるが、歌口周辺の樺はかなり摩耗し、朱漆で大幅に補修している。朱の色が一種類ではないので修復は何度も行われたようだ。しかし樺を巻き直してはいない。指孔部分には長い亀裂が入っており、そこを朱漆で補修しているが、X線透過撮影では、歌口から管尻にかけて亀裂が認められた。X線写真では歌口から第1指孔にかけて切断箇所があり、そこで接いだことがうかがえるが息袋を通して亀裂は一直線につながっている。江戸初期、とするには劣化が著しいようだ。セミは小枝を払った形状である(写真25)。

⑯ 梅花(H-46-55)

付属文書は1通。慶安2年(1649)に大神景福が実父より譲り受けたとの書き付けがあり、図録では室町時代、としている。遠藤徹氏によると、景福の実父は岡昌歳。

歌口には小さな亀裂が入り、朱漆を塗り直しているが吹奏痕は著しくない。頭部は太くないので、女竹であろう。セミは別材で、女竹の小枝を払った形状(写真26)に作ってわざわざはめこんでいる。歌口から各指孔まで、ことに第3指孔以降までの距離はかなり長め。山野井家持来の蟬丸といい、大神家の梅花といい、楽家伝来の笛の寸法が標準より長めなのは興味深い。

X線透過撮影では、切断箇所は認められなかった。歌口から管尻まで一材で成形している。

## ⑰ 芦田鶴(H-46-56)

嘉永2年(1849)奥書の付属文書1通。神田大和介元祖の作で大坂在住の医師松原積載が所持していた由、記されている。樺ではなく籐を巻いており、管尻部分では巻きがスレて白くなっている。歌口部分の籐にもスレがあり、指孔も多少摩耗している。調査時にはセミの位置がずれており、頭部の樺巻が一部切断されていた。ジョイント部分が外れ、戻した際に切断したのだろう。錘がたいへん軽かったが、粉状になっているのがX線写真からうかがえた(写真27)。頭部が外れた際に、錘にも変動があったのだろうか。X線透過撮影では、切断箇所は認められなかった。歌口から管尻までを一材で成形したものである。

## ⑱ 青海波(H-46-57)

付属文書はない。高麗笛(H-46-62)と連管で、一つの筒に収められている。歌口には吹奏痕が認められ、第1指孔付近には巻きのはがれを朱漆で補修した跡がある。頭部が破損しており、本体を入れ子状に製作して錘を挿入する仕組みがうかがえた(写真28)。X線透過撮影では、切断箇所は認められなかった。歌口から管尻までを一材で成形したものである。

## ⑲ 連管(H-46-58)

付属文書はない。銘のない龍笛だが、高麗笛(H-46-63)と連管で、一つの筒に収められている。頭部の錦がきれいに残っているが、歌口の吹奏痕が著しく、唇のあたる箇所をかなり削って黒漆や朱漆で何回も塗り直している。指孔の吹奏痕は著しくないが、摩耗箇所を黒漆で補修し(写真29)、歌口の真うしろにある亀裂は朱漆で埋めている。セミは別材をはめこむ通常の成形だが、セミの横に虫食い風に細工を施している(写真30)。

X線透過撮影では、歌口から第1指孔にかけて2箇所切断箇所が認められた。全長が38.9cmと小ぶりなのは切断した結果とも考えられるが、樺を巻き直したようには見えない。喜久丸同様、製作当初から短めの寸法で作られたのだろう。この管では、歌口から各指孔まで、ことに第1指孔と第2指孔までの距離が標準よりかなり狭い。通常の龍笛より音律が高い可能性がある。

## ⑳ 無銘(H-46-59)

付属文書はない。第1指孔の上方から指孔部分にかけて、裏側に深い亀裂が通っている(写真31)。歌口を朱漆で補修した痕はあるが、指孔の亀裂や樺の切断には修理痕がない。樺巻は朱漆塗りで太い。頭部も女竹。セミは女竹の小枝を払った姿である(写真32)。X線透過撮影では、切断箇所は認められなかった。歌口から管尻までを一材で成形したものである。

## ㉑ お次用(H-46-60(1)~(4))

鳥根文書では「お次用」として4管まとめているが、「お次用」の意味は不明である。鑑定書も付属文書もなく、4管の姿も異なるので、作者・製作年代はそれぞれ別であろう。

4管のうち(1)(2)は製作年代が古いようには見えない。(2)は籐巻。

最も特徴のあるのは(3)である。まず目に付くのがセミだが、昆虫の蟬を意識した形に成形している(写真33)。さらにX線透過撮影の結果、仏像の姿に成形した錘を頭部に挿入していることも判明した(写真34)。セミの形状、錘の細工は江戸時代の趣味、という感じがする。ただし、この笛は指孔付近が摩耗し歌口付近の吹奏痕も他管よりははっきりついている。江戸時代の製作だとしても、早い時期の可能性を考えたい。先述した様にこの管の中から「辟邪丸」の紙片が発見された。

しかし、H-46-40 とこの管のどちらが「辟邪丸」なのか、即断はできない。

(1)は、歌口から各指孔までの距離が標準よりかなり広めになっている。音高に影響がないのかどうか、確認したいところである。

X線撮影の結果、4管とも切断箇所はなく歌口から管尻まで一材で成形していることが判明した。(2)は息袋部分に縦筋が見えるが、これは切断ではなく竹の曲がり直すために入れた切れ込み、と判断される。(3)は息袋部分に縦筋が多く映っているが、いずれも下地として巻いた糸であろう。(4)には錘が挿入されていなかったが、これは本来の姿ではなからう。

## ②……………能管

横笛 27 管中、能管を 2 管含むことは前回の X 線撮影調査で判明していたが、今回の調査で能管とも龍笛ともつかぬ笛が発見されたので、都合 3 管について報告する。

まず、龍笛と異なる能管の工程について簡単に記述しておく。

- ① 能管の特徴は、歌口と第 1 指孔の間を切断して別材を挿入し、その部分の内径を狭めている点(図 2)である。挿入した別材を「喉」と呼んでいる。
- ② 龍笛では頭部に錦でくるんだ栓をはめるが、能管では鍍金した彫り物をはめる。これを「頭金」という。「一文字」,「翁」など能管の銘は、頭金の彫り物にちなむことが多い。
- ③ 能管では指孔・歌口の外側に製作当初から朱漆を塗る。
- ④ 龍笛は蓋のある筒に収納するが、能管の筒はふたがない。

能管についても、歌口の中心から各指孔の中心までの距離を表 2 で示しておいた。参考までに、下関市立長府博物館が所蔵する江戸時代の能管と永青文庫蔵の能管の計測値も載せている。歌口から第 1 指孔までは 11.2~11.5cm, 第 2 指孔までは 13.6~13.9cm, 第 3 指孔までは 16.1~16.3cm, 第 4 指孔までは 18.2~18.5cm, 第 5 指孔までは 20.2~20.5cm, 第 6 指孔までは 22.2~22.5cm, 第 7 指孔までは 24.1~24.4cm が標準である。

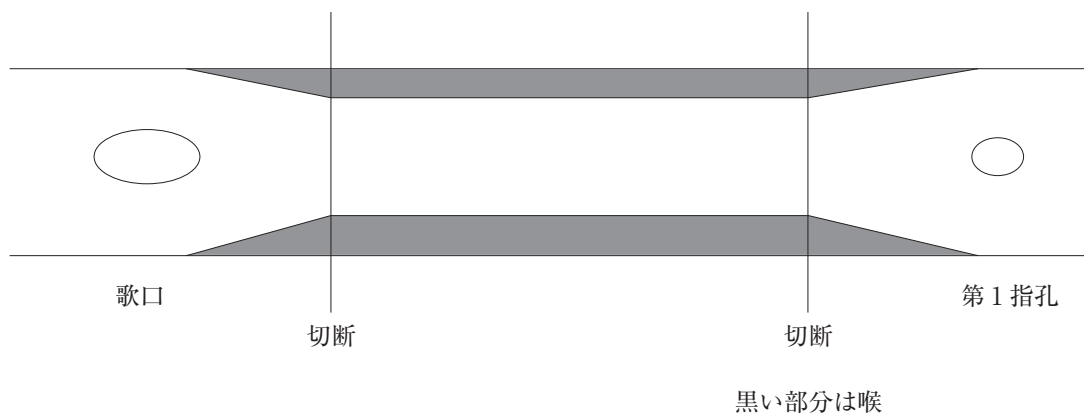


図 2 能管

表2 能管 歌口から各指孔までの距離

| 所蔵者と銘     | 全長   | 頭部から<br>歌口迄 | 第1指孔<br>迄の距離 | 第2指孔<br>迄の距離 | 第3指孔<br>迄の距離 | 第4指孔<br>迄の距離 | 第5指孔<br>迄の距離 | 第6指孔<br>迄の距離 | 第7指孔<br>迄の距離 |
|-----------|------|-------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 歴博 小枝     | 39.7 | 11.05       | 11.6         | 14.1         | 16.45        | 18.65        | 20.75        | 22.8         | 24.5         |
| 歴博 男女川    | 39.2 | 11.15       | 10.975       | 13.5         | 15.85        | 18.05        | 20.125       | 22.15        | 24.075       |
| 歴博 賀松     | 39.2 | 11.5        | 11.45        | 13.85        | 16.1         | 18.2         | 20.3         | 22.2         | 24           |
| 長府博物館 無銘  | 39   | 11          | 11.3         | 13.7         | 15.75        | 17.95        | 20.275       | 22.275       | 24.1         |
| 永青文庫 八重菊  | 38.8 | 11.1        | 11.275       | 13.65        | 15.975       | 18.075       | 20.2         | 22.125       | 23.95        |
| 永青文庫 雅月   | 39.7 | 11.55       | 11.3         | 13.7         | 16.05        | 18.275       | 20.35        | 22.325       | 24.45        |
| 永青文庫 法橋   | 38.7 | 10.875      | 11.35        | 13.75        | 16.15        | 18.275       | 20.3         | 22.175       | 23.9         |
| 永青文庫 7432 | 39.1 | 11.25       | 11.175       | 13.65        | 15.975       | 18.175       | 20.225       | 22.2         | 24.15        |
| 永青文庫 7433 | 39.3 | 10.825      | 11.475       | 13.9         | 16.225       | 18.625       | 20.2         | 22.125       | 24.025       |
| 永青文庫 6548 | 39.2 | 11.15       | 11.35        | 13.85        | 16.075       | 18.175       | 20.3         | 22.225       | 24.15        |
| 永青文庫 7510 | 38.8 | 10.95       | 11.1         | 13.45        | 15.825       | 17.95        | 20.1         | 22.05        | 23.975       |

## ① 男女川(H-46-43)

X線透過撮影写真から、典型的な能管の製法によることが認められた。前回の撮影者が、「ノドの部分に横縞の線があるのは、単なる割れか竹を裏返しにして内側に貼ったか」と発言しているが<sup>(13)</sup>、これは笛本体ではなく、樺巻きの下地として巻くへぎ板につけた切れ目であろうと、田中氏よりご教示いただいた（写真35）。切れ目を入れてへぎ板を曲げ易くしたのである。製作者からの適切なアドバイスがなければ、X線の映像を誤解しかねない。科学的手法には慎重でありたいと思う。

「男女川」には由緒書『横笛男女川記』が付されている。以下の考察に必要なので、引用しておく。（表記の都合上、返り点等は省略した）

和州某村某社有漢竹楽笛一管，不知其所来，笛役森田休音見之為奇，切求取之，令宜竹法橋，改作五音通調之笛，笛頭金獅子割鬮祐乘彫之，休音常愛用之，南龍院殿見玉之，甚被愛賞，因獻之，其後賜休音門弟貴志喜右衛門，屢以此笛勤猿樂云，喜右衛門授養子喜太郎，喜太郎有故遁世，其女藏此笛，正徳六年（1716）之春予強致，懇勤求之，以為家珍号男女川者，以其五音能調，取陰陽和調之義云

享保改元（1716）之秋八月 十河源右衛門

森田休音は森田流2世庄兵衛光時（1615—1686）で、江戸初期の笛役者である。作者の宜竹法橋は、森田光春編『森田流奥義録』の「笛の作者」に載るふたりの宜竹のうちのどちらかであろう。「中古上作之作者」の中の「宜竹」は「江戸（居住地であろう 引用者注）野田次郎右衛門宜近ト称シ、日向ノ国ノ神職ナリ、京都ニモ住ス」と記され、「中作之部」の宜竹は、「法橋宜竹ト言ウ、蟬際ニ法橋ト焼印アリ」と書かれている。

蟬際に「法橋」と焼印のある能管が永青文庫に所蔵されている。しかし「男女川」には焼き印がないので、中古上作の宜竹作ということになるのだろう。

由緒書には楽笛から能管に作り替えた、と書かれているが、この真偽について即断はむずかしい。龍笛は全長約40cm、能管は38～9cmである。外見は近似しているし、能管の方がやや小振りなので、作り替えは容易に見える。だが、問題は全長ではない。龍笛の場合は他の管楽器や弦楽器と合

奏するためにピッチについてかなりの厳密さを求められるが、能管は打楽器と合奏をし、謡にあわせて吹奏するわけではないのでピッチはさほど重視されない。龍笛も能管もブサシという一種の物差しをあてて竹に指孔をあけていくが、能管のブサシと龍笛のブサシは同一ではない。表の数値に表れたように、指孔の間隔が能管と龍笛では異なるわけである。龍笛を短くすれば能管になる、龍笛に喉を挿入すれば能管になるわけではない。江戸初期ともなれば、能管の規格はできあがっているであろう。「男女川」の指孔の位置は龍笛ではなく能管の標準に則っているので単純に龍笛を改造したとは考えにくい。<sup>(14)</sup>『横笛男女記』では「楽笛」と言っているので龍笛以外の笛を改造した可能性も考えられるが、能管に近い「楽笛」がはたして存在するかどうか、そのあたりから検討する必要があるようだ。

歌口はかなり劣化し、朱漆で補修した痕も見える。歌口付近の樺も一部巻きがはがれている。歌口付近を見ると、並行して筋が複数走っており、返シ竹の工法による可能性も考えられる（写真36）。指孔付近で谷グリが浅いのも、返シ竹と関連があるのだろうか。この点も喜久丸と同じで興味深い。指孔や管尻にもかなりの吹奏痕が見え、セミ付近には人工による孔が複数あいている。頭金は獅子（写真37）。

## ② 賀松(H-46-53)

前回のX線撮影で典型的な能管の製法によることが判明したが、笛を収納する筒や皮袋（写真39）、頭金を見れば能管であることは一目瞭然である。筒の上に革袋を被せるのは森田流<sup>(15)</sup>に多いが、紀州藩には代々森田家をはじめとして森田流の笛師が勤めていたから、賀松も森田流の笛師が所有していた可能性が高い。

『森田流奥義録』には、明和年間に笛役者が幕府に提出した『銘管録』が表の形で付載されているが、そこに「紀州家蔵」として「男女川」と「古郷ノ錦」の名が見える。賀松の頭金は菊文様（写真38）で、筒も紅葉を散らした秋の意匠である（写真40）。賀松ではなく古郷ノ錦が本来の銘なのではなかろうか。この笛には由緒書が付属していないので賀松だという根拠も古郷ノ錦だという根拠もないが、デザインから判断すると古郷ノ錦の方が銘としてふさわしい。古郷ノ錦だとしたら、時期は不明ながら伝承が混乱したことになる。

混乱したのは古郷ノ錦だけではない。男女川は、由緒書『横笛男女川記』に「猿楽に用いる」と記されていたにも関わらず、島根文書等では龍笛となっていた。いつコレクションの実態が不明になったのか、そのあたりの事情も今後解明しなければならない。

『銘管録』では、古郷ノ錦の作者は獅子田としている。男女川とはノド工作の様子がかなり異なる（写真41）が、作者が別人だからであろう。しかし獅子田にも「中古上作之部」の「獅子田了竹（古獅子田）」、「中作之部」の「獅子田太兵衛・卯兵衛・栄次郎（了竹の長男・次男・三男）」など複数の獅子田が存在する。どの獅子田なのか現時点では即断できないが、調査事例をふやすことで作者の判別を可能にしていきたい。

## ③ 小枝(H-46-42)

能管とも龍笛ともつかぬ笛、が小枝である。これにも付属文書はない。全長、及び歌口から各指孔までの距離は能管ではなく龍笛の標準に則っているが、指孔は1~1.1cmと小振りですべて正円に近く、能管の指孔に近似している。頭金は外れているが、接着剤（材質不明）が残っている（写真42）

から錦ではなく頭金を嵌めていたのであろう。

管の中をのぞくと息袋の内部になにか白いものが付着してそのために内径が狭まっている様に見えるが、X線写真で確認すると、白く塗布する以前に内径を狭めているようだ(写真45)。ただし切断痕はないので、どのような手法で狭めたのか不明である。

谷グリを施さず、セミは小枝を残した形に細工しているが、大変人工的(写真44)で、およそ細工は能管らしくない。能管の筒に収められていたが、筒の内張に指田伝兵衛と墨書されている(写真43)。指田は、一節切や能管の製作者として知られた江戸時代の工人だが、このように半端な笛を作ったとは信じがたいし、そもそもこの筒がこの笛に付随していたかどうか断言できない。なんとも奇妙な笛である。

## おわりに

姿や工程の珍しい楽器に字数を割いたので変わった笛が多いような印象を与えたかもしれないが、紀州コレクションでは通常の姿の笛が断然多かった。こうした龍笛には由緒書のないものが多いが、劣化も少なく材も枯れていないので江戸期の製作と考えてよいだろう。紙数の関係で言及できなかったが、龍笛以上に高麗笛は江戸時代の製作が大半を占めている。治宝が古楽器だけではなく実際に吹奏できる楽器も収集しようとしたことは明らかである。単なる古物趣味ではなく、演奏に対する思い入れも強かったことがうかがえる。

今回の調査によって、紀州コレクションの伝来を改めて検討しなければならなくなった。国の管轄になる以前にコレクションが少しずつ散逸し、龍笛の寛治丸・青柳、笙の鹿丸・白菊など、コレクションのうちでも『集古十種』<sup>(16)</sup>に載る名器を含む9点が国立劇場(日本芸術文化振興会)の所蔵となったことは夙に知られているが、それ以外も個人の所有となった楽器が確認できるという。それと軌を一にするかどうか不明だが、紀州コレクション自体がいつの頃か混乱し、楽器や文書が本来とは異なる形で収められた可能性がある。各管の項で指摘したことだが、さらなる検証は今後の課題である。

笛の調査、ことにX線透過撮影を伴う調査はこれまでほとんど行われていなかっただけに、今回の調査結果はたいへん貴重であった。透過撮影の結果、紀州コレクションでは、息袋に接ぎのある龍笛が6管あることが判明した<sup>(17)</sup>。24管中の6なので多いとは言えないが、そのうち寸法の短い喜久丸・連管、セミが異形の蟬丸、指田作の可能性が高い力草、初蟬は江戸時代の作と比定されている。歌口から管尻までは音に影響を及ぼすので接がずに成形するのが基本である。秋津丸の接ぎは修理のためと推測されるが、他の5管は製作当初から接いだことになる。材の曲がりや寸が足りないなど材に問題があったのだろうか。別材を接ぐ工法は能管を模したのだろうか。高麗笛では製作の新しい5管のみX線撮影を行なったが、それらを見る限りでは接ぎがない。先述した由緒書のない龍笛も接ぎのない管がほとんどであった。紀州コレクションには平安後期の作と比定される笛はないが、木枯・青柳など一見して古管と認められる龍笛も歌口から管尻まで一材だったし、彦根城博物館の古管にも、歌口から管尻まで接ぎがないものが多かった。接ぎのない工程を基本とする中で、江戸時代に入ってから、工程の中に接ぎを入れる場合が生まれた可能性が考えられる。そ

の理由は、個々に検討しなければならないが、時代とともに龍笛の工法にも少しづつ変化があったとしたら、それを解明する資料が得られたのは大きな収穫と言えよう。

龍笛の工法は、能管の成立にも関わってくる。龍笛を修理する過程で息袋部分に別材を挿入し、その結果内径の狭まった能管が派生したという巷説が通行しているが、実際には古管でも息袋部分を接いだ例は少ない。よほどのことがなければ大事な部分を切断することはなかったわけである。

古楽器を考える際、音高の問題が大きく残る。実際に吹奏できればたやすいが、それが難しい場合が多い。今回も実施することがかなわなかった。いろいろ問題を残すかたちとなったが、笛の構造や製作解明に向けて貴重な資料を得ることが出来たことは事実である。調査に協力してくださった方々への限りない謝辞を持ってこの論を結びたい。

## 註

(1)——紀州藩8代藩主重倫の第2子として誕生。9代治貞の養子となり、家督を継いで10代藩主となった。有職故実や国学に強い関心を示し、国学者との親交も篤かった。コレクションの中には父の取得した楽器も含まれるが、その多くは治宝の収集と考えられている。

(2)——科学研究費補助金による基盤研究(C)「古楽器の形態変化及びジャンル間の交流に関する総合研究」(研究代表者 高桑いづみ 課題番号 20520150)で、2010年現在継続中である。

(3)——平成16年3月発行。執筆担当は、本調査の事実上の責任者である日高薫氏と水野僚子氏である。

(4)——朝陽の付属文書には「筆師治貞之義御尋被下候、右者私方先祖ニ而、則万治・寛文之比盛ニ細工仕候、名前者神田近江守治貞と申候、猶亦神田近江大掾治光と申候ハ、治貞之子ニ而御座候、元禄・宝永之比盛ニ細工仕候 …後略」と書かれている。

(5)——昭和31年に島根県博物館建設促進委員会より刊行された。

(6)——図録では36.4cmとなっているが、これは誤りである。

(7)——『森田流奥義録』森田光春編 1980年 能楽書林発行。森田流の唱歌のあとに、「譜指付律度法秘書」「笛の作者」「明和年間徳川家書上七十種銘管録」など、家に伝来した書を翻刻している。

(8)——牛尾玄笛は『近代四座役者目録』に載る笛役者で、そこには細川幽齋から玄笛と命名された、と書かれている。玄笛については『能楽研究』第8号(法政大学能楽研究所1982年発行)に載る「『四座役者目録』研究会の報告 牛尾玄笛と牛尾藤八」(牛尾美江著)が詳しい。

(9)——小島美子歴史民俗博物館名誉教授を中心とした楽器調査が1992年頃行われている。

(10)——X線撮影を担当した神庭氏が「能管に非常に近いものじゃないかと疑いをもっているものです。…いろんなものが重なって映っており、喉の部分は不鮮明です」(『歴博フォーラム 日本楽器の源流』1995年 国立歴史民俗博物館発行 p116)と発言したのを受けて、小島美子氏は図録の中で「笛本体よりも細めの管を入子のようにさし込んで継いでいる」と断定している。(『音楽史から見た紀州徳川家楽器コレクション』p315)

(11)——小学館刊『日本国語大辞典』の記述による

(12)——井伊家に伝来した雅楽器収蔵目録。古楽器を収集した井伊直亮の自筆と推定される。詳細については斎藤望「資料翻刻『楽器類留』上」『彦根城博物館 研究紀要』第七号(1996年発行)を参照されたい。

(13)——『歴博フォーラム 日本楽器の源流』1995年 国立歴史民俗博物館発行 p116

(14)——小島美子氏は、この文書のみによって「このコレクションの中で従来龍笛とされてきたものの中に二管の能管があった。そのうちの二管には「漢竹の楽笛」(龍笛)を能管に改造したという書付があった。龍笛から能管へという変化の過程はこれで明らかになった」と断言し(『日本の伝統芸能講座 音楽』第1章 淡交社 2008年刊)、他にも類似の文章を書いておられるが、これは早計であろう。

(15)——野村美術館にも、森田流の杉市太郎師の仲介で納入された能管が収められているが、同じような革袋を有している。

(16)——田邊尚雄氏が昭和13年に著した鑑定書では、現在国立劇場が所蔵する楽器が混在して記述されている。

(17)——小島美子氏は図録の中で「龍笛25管のうち、実に14管は喉にあたる部分に修理のあとが見られた。…紀州徳川家楽器コレクションの龍笛と能管は、龍笛か



---

ら能管へという過程を、見事の実証しているといっても、楽器コレクション」と書かれているが、下地として巻いた糸や材の亀裂などを切断と誤解されたようである。

(東京文化財研究所, 国立歴史民俗博物館客員教員)

(2010年5月24日受付, 2011年2月21日審査終了)



写真1 木枯 息道



写真2 木枯 セミ付近の孔



写真3 木枯 竹の亀裂



写真4 秋津丸 セミ

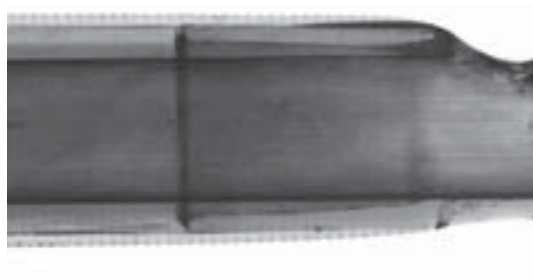


写真5 秋津丸 第1指孔付近

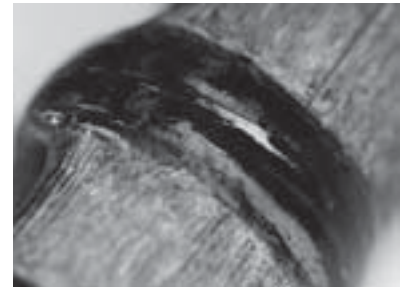


写真6 青柳 下地の糸

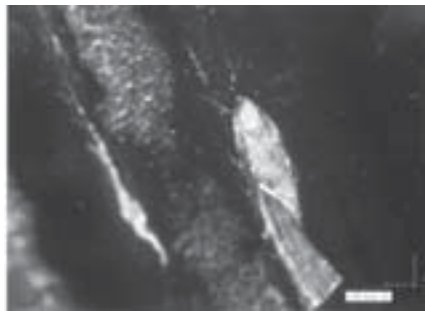


写真7 青柳 植物の繊維



写真8 青柳 指孔部分のスレ

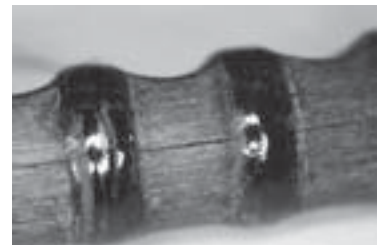


写真9 青柳 指孔部分の亀裂



写真10 青柳 筒



写真11 僻邪丸 セミ

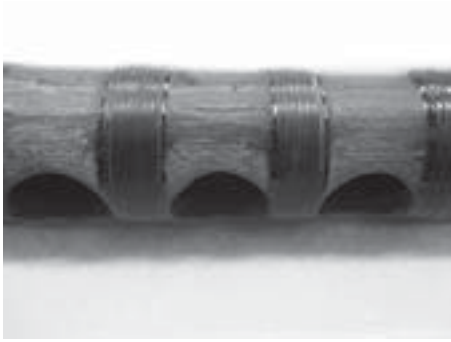


写真12 喜久丸 並行して走る筋

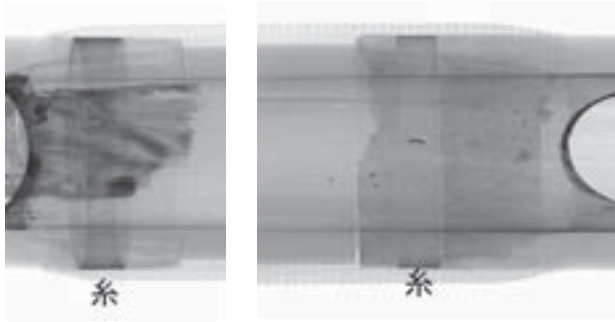


写真13 喜久丸 息袋部分ジョイント



写真14 白雲 指孔の亀裂



写真15 白雲 下地のへギ板



写真16 白雲 管尻のつば腐れ



写真17 金龍 セミ



写真18 蝉丸 セミ

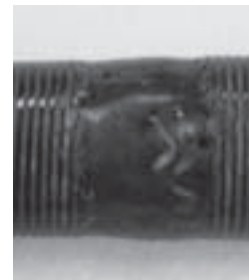


写真20 雲鶴 セミ

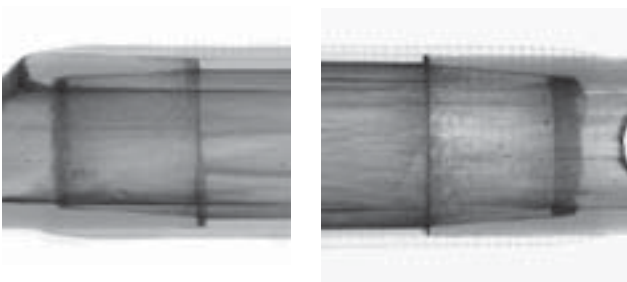


写真19 蝉丸 ジョイント

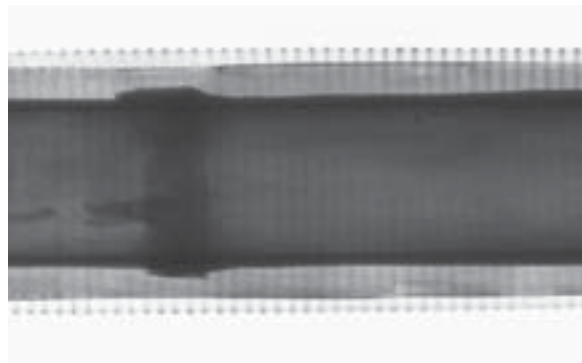


写真21 雲鶴 息袋

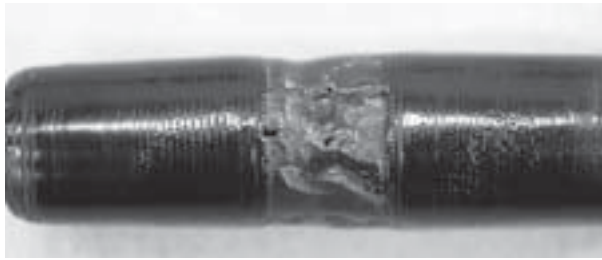


写真22 菊水 セミとあぶく様の表面



写真23 菊水 息袋



写真24 千鳥 セミ

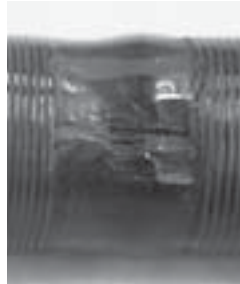


写真25 力草 セミ



写真26 梅花 セミ

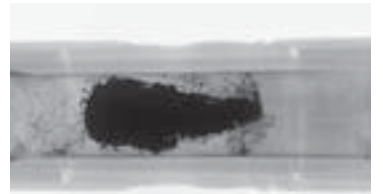


写真27 芦田鶴 錘



写真28 青海波 錘を挿入するしくみ



写真29 連管 歌口の摩耗



写真30 連管 セミ横の孔



写真31 無銘 指孔の深い亀裂



写真32 無銘 セミ

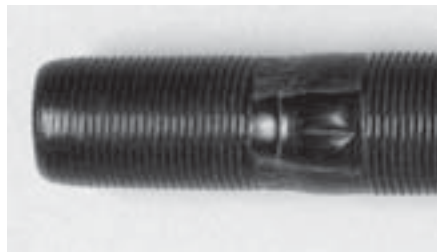


写真33 お次用(3)のセミ

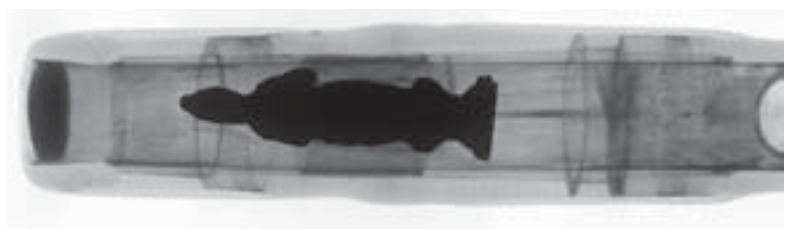


写真34 お次用(3)の錘



写真35 男女川 喉の挿入



写真36 男女川 歌口付近の筋

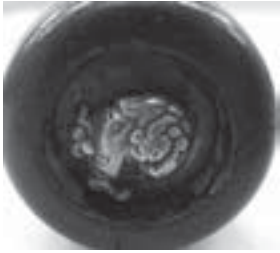


写真37 男女川 頭金



写真38 賀松 頭金



写真42 小枝 頭部

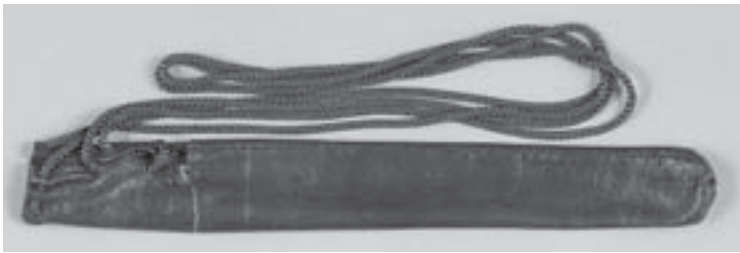


写真39 賀松 革袋



写真43 小枝 筒の中



写真40 賀松の筒



写真44 小枝のセミ



写真41 賀松 ノド



写真45 小枝ノド

## ***Ryuteki / Nokan* of the Heirloom of Kishu-Tokugawa Family**

TAKAKUWA Izumi

Among the musical instruments of the heirloom of Kishu-Tokugawa Family, 27 pieces of *Ryuteki / Nokan* in total owned by the National Museum of Japanese History were investigated through close observation and radiography.

Observation by a high precision electron microscope revealed that vine such as cane or calamus instead of birch was wound around Aoyagi (H46-39), which had been considered to be “Hira kabamaki,” and that some *Ryuteki* had a weight formed into a Buddha statue inserted into its head. This investigation produced many such new findings that had not been revealed by past research. There was a case where the pipe body did not agree with the accompanying document, and there is a possibility that the pipes changed places. As an example, it is inferred that the *Nokan* called Gasho (H46-53) is the “Kokyo no Nishiki” mentioned in Meikanroku, judging from the accessories and the pattern of *Kashiragane* (decorative end cap) at the head. The specific time is not known, but there seems to have been confusion over the actual status of the collection. Since some point in time, Kishu Tokugawa Family’s collection has been scattered and lost gradually. Further investigation is needed to check against the facts.

Key words: Japanese music, musical instrument study, musical instrument, Gagaku, Nogaku, *Ryuteki, Nokan*

---